

白山における中・小哺乳類について

(村上興正と共著)

まえがき

白山では、カモシカ、ニホンツキノワグマ、ニホンザルなどの生息数が多いことは、本書のそれぞれの動物の項目において述べられているところであるが、これら以外の動物についてもその数が豊富であると猟師たちは言っている。しかし今回の白山調査でも、哺乳類に関しては、ニホンザル、カモシカなどの調査に時間と労力を集中した結果、他の中・小哺乳類の実態調査にはほとんど手をつけることができなかつた。したがってここでは、猟師からの聞き込みおよび多少の調査資料をもとにしての覚え書き程度の記述を行なうにとどめたいと考える。

種 類

上記ニホンカモシカ、ニホンツキノワグマ、ニホンザル以外の哺乳類として、白山からすでに報告されているものは次のとおりである(北陸新聞社, 1962)。

翼手目

キクガシラコウモリ科

コキクガシラコウモリ

Rhinolophus cornutus TEMMINCK

ヒナコウモリ科

ヤマコウモリ

Nyctalus lasiopterus SCHREBER

食虫目

トガリネズミ科

ニホンカワネズミ

Chimarrogale platycephala platycephala
TEMMINCK

モグラ科

ヒミズモグラ

モグラ

Urotrichus talpoides TEMMINCK*Mogera* sp.

兔目

ウサギ科

エチゴウサギ

トウホクノウサギ

Lepus brachiurus TEMMINCK

齧齒目

リス科

リス

ムササビ

Sciurus lis TEMMINCK*Petaurista leucogenys* TEMMINCK

ネズミ科

スミスネズミ¹⁾

ヤチネズミ

アカネズミ

Antelionomys smithii THOMAS¹⁾*Clethrionomys andersoni* THOMAS*Apodemus speciosus speciosus*
TEMMINCK*Apodemus geisha* THOMAS

ヒメネズミ

食肉目

イヌ科

タヌキ

Nyctereutes procyonoides viverrinus
TEMMINCK

キツネ

Vulpes vulpes japonica GRAY

イタチ科

テン

Martes melampus melampus WAGNER

イタチ

Mustela sibirica itatsi PALLAS

オコジョ

Mustela erminea nippon LINNAEUS

アナグマ

Meles meles anakuma TEMMINCK

偶蹄目

イノシシ

Sus scrofa leucomystax TEMMINCK

各種類についてのノート

(1) 小哺乳類

ネズミ類その他の小哺乳類の密度調査のため、1966年10月6～8日および1967年5月18～23日の2回にわたって、蛇谷上流の親谷の湯付近にある蛇谷小屋の周辺部と、それより比高約100m上方の尾根の2地区10ヶ所を選んでハジキワナをかけた(図1)。ワナの配列は格子状、線状、およびランダムな3方法を採用し、餌にはテンブラ、カボチャ種子、チクワを用いた。ワナの設置は昼間行ない、翌朝見まわって調べることにし、これを2～4日連続して行なった。各地点でのワナ配列、数、餌とこれらのワナによるネズミ類などの捕獲数は表1に示す。この結果では、尾根上の格子状配列ワナ群では、面積合計1haにわたる範囲に、連続4日間しかけた122個のワナに対して、1頭のネズミもかからず、これに対して沢沿いの地区では、合計約200mの範囲にわたってしかけた107個のワナおよびランダムに配列した30個のワナ(連続1～4日)に対して、合計、アカネズミ4頭、ヒメネズミ2頭、ヒミズモグラ1頭を得たにと

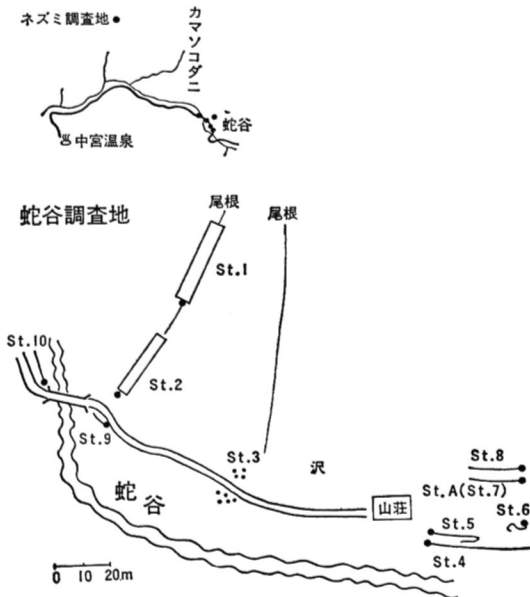


図1 白山蛇谷山荘付近の小哺乳類調査用トラップ配置図

表 1 白山蛇谷荘付近の小哺乳類調査結果

	地点番号	わな配列	わな数	餌	採集した種, 個体数
1966 10. 6-8 (H ₁)	St. A (1967.5 のSt.7)	line 39m (1 m間隔)	40	テンブラ	A.s (3), U. (1)
1967 5.18-23 (H ₂)	St. 1	クォードラート6×100㎡ (2×5mグリッド)	60	カボチャ種子	19日 20日 21日 22日 23日 0 0 0 0
	St. 2	クォードラート4×155㎡ (2×5mグリッド)	62	カボチャ種子	0 0 0 0
	St. 3	ランダム	20	カボチャ種子 チクワ	0 0 0 0
	St. 4	line 58m (2 m間隔)	30	カボチャ種子 (チクワ)	0 A.g(1) 0
	St. 5	line 32m (2 m間隔)	17	カボチャ種子	A.g(1) A.s(1) 0
	St. 6	ランダム	10	カボチャ種子	0 0 0
	St. 7 (St.A)	line 38m (2 m間隔)	20	チクワ	U.(1)
	St. 8	line 38m (2 m間隔)	20	チクワ	0
	St. 9	line 18m (2 m間隔)	10	チクワ	0
	St. 10	line 18m (2 m間隔)	10	チクワ	U.(1)

A.s: *Apodemus speciosus* TEMMINCK アカネズミ
 A.g: *A. geisha* TEMMINCK ヒメネズミ
 U.: *Urotricus talpoides* TEMMINCK ヒミズモグラ

どまった。この採集結果は意外なほど不成績である。その原因に使用した餌が不適であるという可能性も考えられるが、用いた餌は一般的に用いられているものであるから少なくともこの地区ではネズミ密度が低いことが予想される。

また上記の成績だけから判断すると、この地域では尾根沿いよりも沢沿いの地区の方が、アカネズミなどの密度が高いといえるかもしれない。

なおトクズレ谷上部の尾根および岩間温泉付近の尾根で捕獲したマムシの腹中より、ヤチネズミ²⁾ およびアカネズミ 1頭ずつを見出した。花岡, 大杉³⁾によればトウホクヤチネズミは1,800 m以上の地帯に分布すると述べられているが、今回の調査によればトクズレ尾根の高度約1,100 m付近にも分布することが明らかとなった。白山からすでに記録されている小哺乳類では以上のほか、カゲネズミ, モグラ, カワネズミがいるが、聞き込みによれば、カワネズ

ミは蛇谷上流のオモ谷にかなり多く生息しているという。今回の調査においては瀬波川で河村俊蔵氏らによって目撃されている。モグラは今回は採集しなかったので種名は不明であるが、おそらくはアズマモグラであろうと思われる。またカゲネズミ(スミスネズミ)は1,800m以下に分布するとされている(北陸新聞社, 1962)が、今回の調査では確認できなかった。

猟師からの聞き込みでは蛇谷ではこのほかりスが多くすんでいるという。しかし標本についての確認はない。

(2) ノウサギ

このウサギはかつて白山山麓一帯に極めて多く、蛇谷でも2~3時間で10数頭捕獲できたといい、また白峰村でも1人で1冬に300頭とった人もいるという(河合, 1966)。しかし1960年前後以来、その数は激減した模様であって、白峰村の消防団が行なう年1度のウサギ狩りでは1巻き100haを囲んで、1965年には40頭、1964年には3頭しかとれなかったという(河合, 1966)。白山山麓では戦後、囊包虫様の寄生虫が、皮下、筋肉、内臓にぎっしりつまったウサギがとれはじめ、この寄生を受けたウサギはやせ衰え、行動も鈍くなっていて、すぐ獲ることができるという。そしてこの寄生虫が発生してから、ウサギが激減していったらしいと考える人もいることを河合(1966)は述べている。

なお今回の調査において、1967年5月冠山標高約1,500mの地点で50×50mの方形区を設置して調査⁴⁾したところ、約460個のウサギ糞を見出した。1ヶ所の調査だけでは確言はできないが、山麓地帯のウサギ数は激減したものの、山奥にはまだかなりの密度を保持しているのではないと思われる。

(3) タヌキ、キツネ、テン、イタチ、アナグマ

上記5種のうち、キツネ、イタチを除く4種はかなり多く生息すると思われる、聞き込みではタヌキ、アナグマ、テンのそれぞれの数の比は3:2:1であるというものもあれば、またタヌキ:テン:キツネの比は50:10:1以下であるというものもある。われわれが1966年10月に中宮温泉より湯ノ谷頭に至る尾根筋登山道を調査した際に見出したテンの糞は約4kmの間に17個、すなわち1km当り4~5個の割合であったところをみると(表2)、少なくともテン密度はかなり高いと考えられ、上記の聞き込みによる数の比からすれば、タヌキ、アナグマについてはさらに高密度の生息が予想される。直接比較すること

表 2 湯ノ谷尾根登山路に沿う糞の分布

		尾 根				谷	
海拔高 (m) (1, 100)		(1, 540)		(1, 500)	(1, 500)		
水平距離 (km)		0	1	2	3	4	5 km
テ	ン	7	6	1	3		
ク	マ	2	1				1
サ	ル	(群れ)	6				
カ	モシカ		(踏跡)				1
ウ	サギ		1	1	1		

は危険ではあるが、上記の聞き込みにおいては、テンの数はほぼカモシカ数と同じ程度であるという答えを得ているのは興味がある。これが正しければカモシカ密度を基本にして他動物密度の推算も可能になるからであるが、現在すぐこの計算から各動物の密度推定を行なうのは早計にすぎるであろう。

(4) 他の哺乳類について

白山の中型哺乳類としては以上のほか、ムササビ、エチゴウサギ、オコジョ、ニホンカワウソが報告されているが、このうちニホンカワウソは現在では姿を消したと地元では言っている。他の種類は生息はしていても、聞き込みではその密度はきわめて低いようである。なお翼手類として、コキクガシラコウモリは尾口村瀬戸の洞穴にヤマコウモリは山麓地に生息することが報告されている(北陸新聞社, 1962)が、その密度その他については特に記すだけの資料は得られなかった。

あ と が き

中型哺乳類の密度推定は、大型哺乳類の場合と同様、現在最も困難な問題の一つである。多くのトラップを用い、多大の労力と費用を費せば、かなり高い精度の推定ができると思われるが、これが困難な現状では、聞き込みその他信頼度は低くても比較的手軽な方法にたよらざるを得ない。ただし糞調査や林(1969)の開発しつつある積雪時の足跡調査による密度推定法などを今後活用することによって、かなり推定精度を高めることはできるものと思われる。ま

た小型哺乳類の個体数推定はサルを除いては哺乳類中では最も進んでおり、かなりの精度で個体数推定を行なうことが可能であるが、今回の調査では特別天然記念物であるニホンカモシカなどの大型哺乳類に中心をおいたため、時間的にも労力的にも余裕がなく、断片的な資料しか得ることができなかった。しかしこれからも調査を継続することによって、この地における哺乳類社会の全貌を明らかにしていきたいと考える。

引用文献

- 林知己夫, 1969 動く調査対象集団に対する標本調査について III—野兎生息個体総数推定のための足跡調査と分析— 統計数理研究所彙報, 17(1): 5~21.
 河合雅雄, 1966 白山のけもの(2). 野猿 25: 8—11.
 北陸新聞社編, 1962 白山. 北国新聞社.
 TOKUDA, M., 1941 A revised monograph of the Japanese and Manchou-Korean Muridae. *Trans. Biogeogr. Soc. Jap.* 4; 1—155.

注

- 1) [356頁] 記録においてはカゲネズミと記載されている(北陸新聞社編, 白山, 1962)が徳田(1941)の分類体系を用いて, スミスネズミとした。
- 2) [358頁] 相見 満(京大・理・動物)の同定による。
- 3) [358頁] 北陸新聞社編, 白山, (1962)
- 4) [358頁] 河村俊蔵氏その他の大阪市大班による調査。

